

第94・95号

1985年1月25日

内 容

大学を開く	1~2
第21回大学教員懇談会	2~3
第6回国際フォーラム	3
第7回大学合同セミナー	4
第129回大学共同セミナー	5~6
新版『利用者の手引き』が完成	6
寄付金報告	7
事業部だより	8~9
利用状況	9~12
わたしたちの会館	11

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発 行

財団法人 大学セミナー・ハウス

〈所在地〉

東京都八王子市下柚木(☎192-093)

電 話 0426-76-8511~3

振替口座 東京 5-74590番

編 集

大学セミナー・ハウス

企画室

編 集 人 中川秀恭

発行人 吉川孔敏

製作 中央公論事業出版

大学を開く……1~2
第21回大学教員懇談会……2~3
第6回国際フォーラム……3
第7回大学合同セミナー……4
第129回大学共同セミナー……5~6
新版『利用者の手引き』が完成……6
寄付金報告……7
事業部だより……8~9
利用状況……9~12
わたしたちの会館……11

昭和三五年には見るべき進展がなかったが、三六年(一九六六)飯田氏は茅、大浜早大総長と共に佐藤喜一郎三井銀行会長を訪ね、建設資金募金運動の中心になっていただくよう懇請した。佐藤氏はこ

当ハウスの発足は昭和三四年(一九五九)に遡る。この年在野の一人物飯田宗一郎氏の脳裡に一つの構想が浮かんだ。「大学セミナー・ハウスの生い立ち」は、形式的な手法は何もなかった。当時の大学教育の現状を見て考え、一体これでもよいものだろうか疑問をもったことにはじまるのである。

……私は既成の観念から離れて、大衆の中の孤独という寂寥や不完全な学生生活が起り易い大学の教育的環境を問い直して見た。セミナー・ハウスの構想がそこから浮かびあがった。『大学を開く』『大学セミナー・ハウス創立十年史・開館七年史』一一頁。

こうして「教師と学生との心の交流をつくる合宿研修センターの如き施設をつくりたい」という構想をまとめた氏は、かねて同じ教会に属していた同信の日本女子大学の土代たの学長を訪ねて、それを披瀝した(昭和三四年一月)。上代学長は打てばひびくように共鳴、この計画推進のために国立大学側からは茅誠司東大総長、私立大学側から大浜信泉早大総長に仲間入りしていただくことが絶対に必要だと進言された。

そこで飯田氏は同じ年の二月、茅東大総長、大浜早大総長を訪問、この構想を開陳してそれぞれ理解を得た。

昭和三七七年(一九六二)三月、財団法人設立認可。設立趣意書はこううたっている。「セミナー・ハウスは指導教授を中心とする学生的小集団に対し、研修、研修、実際の場を提供することを主たる目的とする……他方同じまたは関連のある学問分野の研究者や学生、或いは各大学行政者が、セミナーを開くためにも国公私立を越えた立場の施設が最も望ましい。セミナー・ハウスは大学相互の諸活動を円滑にすることを第二の目的としている。これを要するに、セミナー・ハウスは大学という機構の外にあって、大学教育並びに

の施設が国・公・私立大学の共同利用に供せられるという点に共鳴、懇請に応じられた。こうしてセミナー・ハウス設立計画が前進することになった。

同年一月三〇日、財団法人大学セミナー・ハウス設立発起人会開催、理事長に石館守三東大名譽教授、常務理事に飯田宗一郎氏、理事に茅東大総長、大浜早大総長、上代日本女子大学学長、その他一橋大、慶応義塾大、東工大、立大、都立大、上智大、明大、東大、中央大、青山学院をあわせて三十三大学の代表者が理事に就任することとなった。

それと平行して、佐藤三井銀行会長を中心として、財界のトップの方々を建設後援会役員にお願いして募金を開始した。文部省も格段の理解を示し、建設費の一部に達する補助金を交付された。

昭和四〇年(一九六五)七月五日開館式挙行。大河内一男東大総

大学を開く

開館20周年を迎えるにあたって



理事長
館長 中川 秀恭

長をはじめ各大学代表者、一般来賓、開館記念セミナー参加学生、その他を加えて二〇〇名が列席した。かくして、わが国の学界、財界の指導的立場にある方々の全面的支援の下に、教育界、一般社会の大いなる期待をになって、大学セミナー・ハウスがここに発足したのである。

当日上代たの氏の寄せられた開館祝賀メッセージの一節にこうある。「今後、この丘でどのような新しい生命の芽がはぐくみ育てられることであろうか。どのような奇跡的そして偉大な仕事をなし得る基礎が築かれることであろうか。

大学相互の交流に協力する奉仕機関である。」

これよりさき、二月京王電鉄所今の現在地を買収、一月早大建築学科の吉阪隆正教授に設計を依頼、三十九年(一九六四)清水建設株式会社によって建築工事がはじめられた。

それと平行して、佐藤三井銀行会長を中心として、財界のトップの方々を建設後援会役員にお願いして募金を開始した。文部省も格段の理解を示し、建設費の一部に達する補助金を交付された。

しかし、この二〇年間に、セミナー・ハウスのおかれている物的・精神的状況も変わった。ハウス周辺は宅地化が進み、キャンパスの自然環境は孤島になろうとしている。諸大学もそれぞれ独自のセミナー・ハウスを設置して、自校、ないし他校の学生・教員の研修に供し、合宿・研修を事業とする業者すら現われてきつつある。ハウスの諸施設の老朽化もひどく、その修理のための経費も年々増加している。他方、学生諸君の精神的状況も変わったように思われる。関心をそそる行事が多い故

か。大いなる精神のめざめと運動がここに生れ、有形無形に新しい日本を創出し、またひいては人類の幸福と繁栄のために貢献し得る人々がこの丘の上から社会に送り出すことが出来るであろうか。私の夢は限りなく大きくひろがって行く。」

二
爾来二〇年、中央講堂、図書館、教師館、国際セミナー館、長期セミナー館、大学院セミナー館、交友館、遠来荘等が、善意に基づく寄付によって逐次建設され、今日の偉容を見るにいたった。

その間、八十数万の学生がここで研修、国公立大学の学生、教員の参加による大学共同セミナーは一三〇回を数え、大学間の横のつながりを強めるための大学教員懇談会——全国大学教授連合を吸収して、わが国における唯一の国公立大学教員の組織となった。は二十数回行われた。

(次ページ5段めへつづく)

第21回大学教員懇談会

主題Ⅱ時代の変遷に伴う大学の将来像(そのⅡ)

——大学はこれでよいのか——

Ⅰ 発題講演

転機に立つ大学

文部省顧問 天城 勲氏

Ⅱ 話題提供

Ⅰ 現代の学生像——大学は人格形成に何をなしているのか——

立教大学学生相談所カウンセラー 平木典子氏

Ⅱ 大学生から見た教師像

東京学芸大学助教授 宮腰 賢氏

Ⅲ グループ・ディスカッション・報告者

東京経済大学教授 中島義博氏

東京農工大学教授 川名 明氏

一橋大学教授 堀部政男氏

青山学院大学教授 坂本百大氏

慶応義塾大学教授 石崎秀和氏

慶応義塾大学教授 小池生夫氏

国際基督教大学教授 網川正吉氏

東京学芸大学助教授 宮腰 賢氏

Ⅳ 参加者

△立教大(5)・東工大・

電通大・中大・法大(各3)・千葉

大・一橋大・都立大・青学大・大

妻女子大・ICU・慶大・芝浦工

大・東海大・東京女子大・東京電

機大・東京理科大・日大・明学大

(各2)・筑波大・埼玉大・東大・

東外大・東京学芸大・東京農工大・

杏林大・工学院大・駒沢大・上智

大・聖心女子大・東経大・東京農

大・武蔵工大・都立立川短大・産

科大

大

大

大

大

大

大

大

期日——84年10月6・7日
能短大(各1)・その他(1)

◇

「臨教審」「教員免許法改正」など社会的、政治的文脈で大学問題が論じられる一方で、来春より「ゆとり」を標榜した新学習指導要領実施後の第1回卒業生が入学して来る。今や大学は内外から大きな転換を迫られている。前回のテーマを受けて、今回は「教師から見た学生像」と「大学生から見た教師像」を手がかりに今後の大学教育のあり方、大学教員のなすべきことなどについて実態に即した意見交換が行なわれた。

プログラムは、天城氏による発題講演「転機に立つ大学」で開始した。

氏は社会の大学教育に対する評価、研究機関としての能力低下、学生の意識変化、今後の一八歳人口の動態などから見て、昭和六〇

以降、戦後の高等教育史上に例のない大きな試練を経験するだろう、と転換期にある大学の将来像について大要次のように述べられた。

▽一八歳人口激増の対策

今一番大きな問題は、60年以降の一八歳人口の動態に対する対策だ。ガイド・ラインとしては進学率を三五%で推移するものと仮定し、昭和67年を頂点とする激増期には通常の定員増と「期限付き」定員増でカバーし、教員や施設の拡充は控える。その後の激増期には、留学生、社会人を受け入れながら水増率を下げっていく計画である。

▽大学の個性化

すでにアメリカの大学では、学生の募集をめぐるサバイバル・ストラテジーが展開されているが、日本も67年以降、同様の問題に直面するであろう。大学は多様化の時代にあつて、もう一度「大学の目的」について真剣に考えていかなければならない。抽象的な「建学の精神」ではなく、時代に即応した各大学の使命を考える必要がある。

▽一般教育の活性化

入試制度・カリキュラム編成・一般と専門等々の問題は、相互に密接に関連しており不可分のものとして考えていかなければならないが、個性化を実現するためにはこれまでの一般教育の考え方を反省し、その位置づけやカリキュラムの工夫が必要だろう。今や学部四年間で特色ある専門教育をすることは不可能だから、一般教育の発揮していかなければなら

い。

セッションⅡでは、カウンセラーの平木氏から「現代の学生像」について、また宮腰氏から「大学生から見た教師像」について大要次のようなお話があったが、両氏の具体的な事例に即した発題は参会者に大きな反響を呼んだ。

▽現代の学生像

教育界全体の歪みが大学生の病理現象となつて現われている。成績のよい、真面目な学生ほどスチュデント・アパシーに陥りやすく、障害に遭遇したときの抵抗力がない。大学を高校の延長で考えているので、欠席したことをひどく気にかけて登校できなくなった。りして悶々としている。試験恐怖、会食不能、排尿不能、摂食異常などの成熟拒否の症状が見られる。今の学生は受験競争と偏差値教育の中で、自分がどういう目的で大学に進学するのかわからないまま入学してくる。受験競争の中で人格形成を棚上げしてきたつけが、大学入学後に噴出する。

大部分の未成熟な学生を無視して専門教育が果たして可能か。教師は学生の実態を踏まえて、「人間形成」という観点から今後の大学のあるべき姿を考えてほしい。

▽大学生から見た教師像

実態調査によれば、学生はもはや大学に学問・研究の場を求めて入学してくるのではなく、課外活動を中心とした大学生活を楽しむために入学してくるのだという。教師もこれまでとは違うつき合い方が要求されている。学生も入学当初は、勉学意欲も旺盛なのだが、大学の授業に失望することが多い。

(前ページからつづく)

か、ハウスで企画するセミナーに参加する者の数は必ずしも増加しない。

しかし、この丘で数日を過ごした学生は新しい発見をするようだ。「セミナーの二日目の朝には早目に起きて散歩してみた。都会の喧噪は野鳥のさえずりにとってかわる。まさに、知的好奇心にかきた。自由に議論しあうにふさわしい場所だ。……短期間ではあったがこのセミナー中、雑事に気をとられることなく思索をめぐらし、あるいは多摩の自然の中で瞑想的な雰囲気ひたることができたように思う。知的に活性化された空気とは、そういう意味なのであるが、日常生活で鈍った頭を快く覚醒させてくれた三日間であった。」これは大学共同セミナーに参加した一学生の感想である。

セミナー・ハウスの希望はここにあると思う。開館20周年を迎えるにあたって、記念事業の計画がねられており、やがて公表されよう。ハウス運営の責任を担うものの一人としては、協力・準協力会員校はもとより、大方の御理解と御支援のもと、ハウスの職員一同と協力・創立の初心にかえって、この意義深い事業に挺身したい。

最後に、これまでに賜った大方よりの御理解と御支援に対し厚く御礼を申し上げると共に、今後の御指導と御助力とをお願いする。

学生によれば、「教えてくれない」「声がきこえない」「板書の字が読めない」「先生の言っていることがわからない」「先生に意欲がない」「答案を返してくれない」な

い。

い。

い。

い。

い。

い。

い。

い。

い。

い。

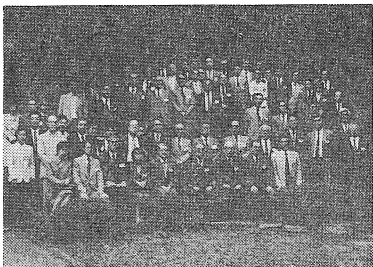
い。

い。

い。

い。

い。



学生像と教師像を撮る(ようこそ広場)

第6回
国際フォーラム

“1984” as envisioned by George Orwell,
and as witnessed in the world today
through the eyes of the London Times

期日——84年11月8～9日

△ゲスト▽

ロンドン・タイムズ社

Foreign Editor

サイモン・S・プラマー氏

△コメンテーター▽

東京外国語大学教授

小浪 充氏

防衛庁防衛研修所教官

高橋久志氏

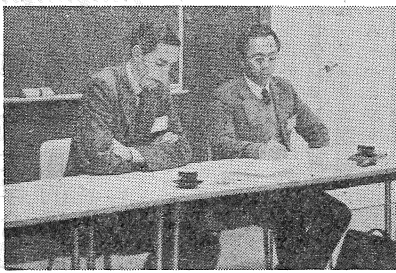
△運営委員▽

上智大学国際関係研究所長

三輪公忠氏

△出席者▽大東百合子(津田塾大)、渡辺昭夫(東京大)、山澤逸平(一橋大)、ハッサン・ハナフイ(カイロ大)、高柳俊一(上智大)、市川節子(新潟大)、マリオン・ステイル(ICU)、本間正人(松下政経塾生)、ウィリアム・カーター(ハーバード大)

生)の諸氏。



サイモン・S・プラマー氏(左)と三輪公忠氏

◇

ゲスト・スピーカー、サイモン・S・プラマー氏は、創刊二〇〇年の歴史を迎えたイギリスの新聞「タイムズ」(The Times)のForeign Editorとして、第一線で活躍されているジャーナリストである。今回のフォーラムは、氏が日本の政治や文化を一人の旅人として見つめてみたいとの年来の希望を果たすべく、一カ月滞日された機会をとらえて、三輪公忠氏(国際プログラム委員会副委員長)の尽力により実現した。

当日は、三名の外国人を含め、哲学、文学、言語学、国際関係論等のさまざまな分野の専門家が会し、氏を囲んで、和やかな中にも活気に満ちた議論が、夜遅くまで展開された。

◇

ジョージ・オーウェルの『一九八四年』は、あらゆる人間性の収奪の上に成立した全体主義(Totalitarianism)国家の不毛な姿を描写しているが、果たしてわれわれが直面している一九八四年の現実、彼が描き出した世界に近接しつつあるのだろうか。プラマー氏の発題は、オーウェルの『一九八四年』の視角から、実際に今年「タイムズ」に掲載された論説、記事、投書の紹介と分析を通じて、現実の一九八四年の状況を読み解いてゆく形で進められた。氏は、はじめにオーウェルの中

心的メッセージが、言葉を政治的道具として利用した「言語の堕落」の問題にあるとした「タイムズ」の論説を紹介。全体主義国家ばかりでなく、イギリスのような自由主義社会も、常に文化の破壊へと繋がる言語の簡略化の危険性に曝されており、文明の健全な発展のためには、より豊かな言語表現が不可欠である点を強調された。

氏の発題の後半は、「タイムズ」のモスクワ特派員からの報告記事を参考にしたがら、ソ連社会とオーウェルの世界との類似点と相違点についての分析であった。結論として『一九八四年』に描かれた国家像は、全体主義国家到来の危険性を余すところなく告発し、その意味で西欧世界の民主主義を保持してゆくのに大きな寄与をしていると結ばれた。

夕食を挟んだのフリー・ディスカッションでは、コメンテーターの小浪氏が、表現の微妙な差異を捨象し、人間の思考過程を単純化するコンピュータ言語の例を用いて、現在のニュー・テクノロジーの持つ非人間的側面を指摘。また、高橋氏は、現代世界において言語の問題がますます深刻化している事実をとりあげ、どのようにしてわれわれは非人間化の過程を食い止め、それを人間的なものへと変換してゆくことができるのかを、真剣に模索しなければならぬと訴えた。特に、「多くの方法の中でも、この種の知的交流は、一つの有力な方法でありうる」との氏の指摘は、今回のフォーラムの特つ意義を集約するにふさわしい言葉であったといえよう。

どの学問研究以前の問題ともいえるような教師に対する批判がある。もし今後とも大学が教育機関たるうとするならば、小・中学校の教師が行なうような授業の工夫が必要なのではないか。

以上の両氏による話題提供に対して、教師は果たしてそこまで学生の実態に合わせなくては行けないのか、学生の変化は構造的な問題を孕んでおり教師の努力だけでは解決できないのではないのか、など活発な発言が続いたが、時間の関係で討論はひとまず打ち切られ、夕食後のグループ・ディスカッションの場へ持ち越された。

◇

最終日の総括討論では、まず前夜のグループ・ディスカッションの報告があった。要約すれば、第一に、学生の変化に対する教師の対応として、①学生に興味をおこさせる授業を行なう、②学生に主体的にかかわらせる、③学生との人格的な接触をはかる、等が指摘された。第二に、制度上の問題として、①魅力あるカリキュラムの編成、②一般教育の理念の明確化と活性化、③人格形成を阻む受験体制の問題、④期限付き定員増に対する批判、等があげられた。

報告を踏まえて、司会の宮腰氏より第一に、学生は本当に変化しているのか、それに対する教師の対応はどうかあるべきか、第二に、制度上の問題に対して教師としてもっと積極的に発言していくべきではないか、という問題提起があった。以下は、その後につづいた討論の中から、いくつかの発言を拾って要約したものである。

参加者が平木氏の描いた学生像に賛意を示し、各々の体験談が披露されたが、それに対する教師側の態度については意見の食い違いがみられた。教師が大学生のレベルに合わせる必要はない、むしろ突きはなすことが必要だという意見。また、大学の学問研究はあくまで「よい教育」を行なうためのもので、教育努力もせず学生を突き放すべきではない、レジャーランド化した大学にあっても「主体的に物事を考えることのできる学生」を育成する創意工夫が必要だという意見も出された。

さらに、問題解決を教師個人の倫理問題に解消されるのではなく、大学の制度的な面に目を向け、大学教師として積極的に発言していくべきではないか、という指摘もあった。制度改革については、十分な議論がなされなかったが、これまでのように教養と専門を区別するのではなく、大学四年間でどのような人材を育成するのか、そのためにはどういうカリキュラムを組むべきか、ということを考えていかなければならない、という意見が全体を総括したもので、いえよう。

社会が急速に変貌を遂げる中で、いまや大学は自らの存在意義そのものを問い直されようとしている。今回は「教師の努力から制度面の問題の所在を指摘する」とこととどまらず、今後が大学教師の意識変革と同時に制度改革に対する発言を積極的にしていかなければならないだろう。なお詳細は企画室編集の『第21回大学教員懇談会記録書』(実費頒布)をご覧ください。

第7回大学合同セミナー

主題Ⅱ 近代的経済・経営思想の生成

— イギリス・アメリカ・フランス・日本
およびインドネシアの事例をめぐって —

△全体講義▽

倫理と営利—— 洪沢栄一をめぐって —

東京外国語大学教授 長 幸男氏
△セクション演習▽

A アメリカ建国期の経済思想 —

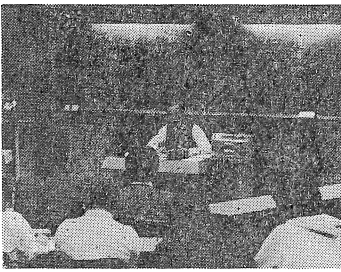
明治大学教授 田村光三氏
B 革新主義時代の思想とアメリカ人— プラグマティズムを中心として —

国学院大学教授 寿永欣三郎氏
C 高賃金と低賃金— その思想的背景について —

中央大学教授 山下幸夫氏
D イギリスの経営思想— 勞使関係の文脈のなかで —

明治大学短大教授 岡山礼子氏
E 開発途上国における近代化と伝統の相克— インドネシアを中心に —

中央大学教授 吉沢四郎氏



洪沢翁の肉声をテープで聞く
—— 長幸男氏の全体講義

期日—— 84年11月16・18日

F 近代フランスにおける経済(経営)思想

早稲田大学教授 原 輝史氏
△運営委員▽

中央大学教授 山下幸夫氏
明治大学教授 田村光三氏

△参加学生▽90名(内女子16名)
中大(26)、国学院大(22)、早大、

明大短期大(各15)、明大(12)

◇ 近代の経済・経営思想の生成を

主要テーマとした大学合同セミナーは、昨年度に四大学四ゼミ六五名の参加の下で開催されたが、今回はその二回目となるものである。新たに二つのゼミを加え、五大学六ゼミから九〇名の参加者を数えた。

◇ 近代社会を構築し、その発展を

つき動かしてきた経済・経営思想とは一体、何であったのか。この問題意識を今回は、フランスの事例を加えることによってさらに深めるとともに、インドネシアといういわば「非近代」の事例を糸口にして、現代社会の建設の上に果たしてきた経済・経営思想の役割と限界性を探ろうと試みた。

◇ プログラムは開講式に続いて、

セクション演習の指導教授六人による講義が順次行なわれた。参加者が共通理解を持つための導入部として、各セクションのアウトラ

インがそこで提示されたが、紙面の都合で、ここでは今回新たに参画された吉沢四郎(E)、原輝史(F)の二氏の講義を紹介するにとどめた。

開発途上国の経済構造は西欧の高度資本主義体制と土着の前資本主義的な村落経済の二重構造として捉えられるが、吉沢氏は、農村社会学の専門家の立場で、一九八〇—八一年にわたり調査研究に携わったインドネシアの農村社会を通して、近代化過程における伝統的エートスのもつ意味を明らかにしようとした。

その際、ジャワ農村の停滞性を伝統主義的農民エートスにもとめたJ・H・ブーケと、オランダの植民地支配による強制的栽培制度にもとめたC・ギアツの理論に触れて、農村社会における集団的結合の捉え方が、両者の見方の相違を導いた点を指摘した。

また「緑の革命」による新技術導入が、「生存の論理」をもつ農村社会を解体させている事実や、日本企業の進出、日本の商品の流入がインドネシア社会に及ぼす深刻な影響に言及して、伝統的価値意識を近代化の阻害要因として位置づけるのではなく、その価値観を通して近代の論理を捉えかえすことの重要性を強調された。

次に、原氏は、フランスにおける近代的経済思想を、一七八九年のフランス革命以後に展開されたものと定義し、①競争観、②利潤観、③企業経営観の三点から分析を試みた。

まず競争観については一八一〇年のナポレオン法典を中心に、革命以後に制定された法律を検討

し、市場における独立の市民の平等な関係、需要と供給の法則の前提となる「自然かつ自由な商業競争」といった資本主義経済の核心が、それらに規定されていることを指摘した。

また利潤観については、トーマス・アキナスの『神学大全』にみる経済思想を手がかりに、そこに表われている利子観、財富観を検討し、フランスの企業経営はカソリックの影響下で無限の拡大に歯止めがかけられてきた点を明らかにされた。

◇ 二日目の午後は、長幸男氏の全

体講義と指導教授全員の参加によるパネル・ディスカッションが行なわれた。長氏は前回のセミナーで、日本の資本主義的経営意識の形成に儒教倫理が大きな役割を果たしてきた点を詳細な分析を通して語られたが、今回は洪沢栄一の

人と思想に焦点を当て、日本における近代化の実相に迫られた。この中で聴衆は長氏の持参された録音テープから、大正12年、八三歳の洪沢翁が、『道徳経済合一説』について語っている、その肉声に接するという得がたい機会を与えられた。

明治維新は領土経済から国民経済への転換を導いたが、改進黨の経営者を育成するために自らも実業家となった洪沢が何よりも重視したことは、日本の中に新しい勤勞の倫理をつくることであった。M・ウェーバーはプロテスタントの世俗内禁欲の倫理が、特殊近代西欧的な資本主義を結果として生み出したと考えたが、日本の精神的伝統の中にある道徳価値

を、近代社会の倫理に読みかえていったものが、洪沢の唱えた「道徳経済合一説」(「論語算盤説」)である。

しかし、現世の秩序に理想をおき、それへの恭順を自己の修練とする儒教倫理が、近代資本主義形成のエートスになりえたのはなぜか。長氏は、次の二点を理由としてあげられた。一つには、資本主義的な体制がひとたび日本社会の規範となる価値へと転換してしまふと、封建制度内での倫理はそのまま新しい社会システムに対する恭順に移行していった。二つには、資本主義経営が生み出すピラミッド型の合理的組織体系が、儒教の上下関係の倫理に案外適合的であった。

以上の問題提起を受け、パネルは主としてプロテスタンティズムの倫理と儒教倫理の対比をめぐって展開した。

西ヨーロッパにおいて、プロテスタントの倫理が資本主義をつくり上げたということは、個別的・一回性の歴史的事実である。非ヨーロッパ社会は、その事実とどう関係し合って、自らの存在を維持していくか。日本は一九世紀半ば以降、近代的個人の成立とは無関係に西欧に伍して価値法則に基づき資本主義社会を形成してきた。

そこに価値観を超えた不可避性があるといわざるを得ないし、そのような形態でしか西洋に対抗できなかった。以上の長氏の発言が、一方で指摘された東南アジアの現状——日本の大企業と特権階級の着が顕著になっている——と重なり合って、印象的であった。

第129回大学共同セミナー

主題Ⅱ 男と女——性差の本質とその文化的意味——

期日——84年11月23・25日

△全体講義▽

男と女——体の構造と働きの違い——

筑波大学教授 岩崎寛和氏

△座談会▽

日本の社会における差別の構造をめぐって

(ゲスト) 作家 安岡章太郎氏

△セクシオン演習▽

A 男女差・分業とコスモロジー

筑波大学教授 綾部恒雄氏

B 男と女——イスラーム社会の性——

国立民族学博物館教授 片倉もとこ氏

C アメリカの男と女

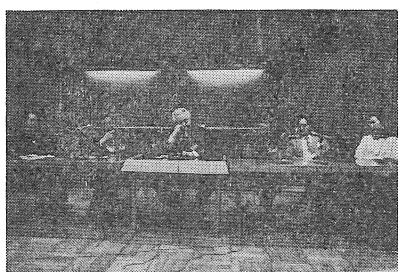
東京大学教授 亀井俊介氏

D ヨーロッパの男と女

武蔵大学教授 杉田弘子氏

△運営委員▽

国際基督教大学教授



座談会：左から青柳、亀井、安岡、杉田、綾部、片倉の諸氏（講堂）

青柳清孝氏

武蔵大学教授 杉田弘子氏

△参加学生▽52名（内女子37名）

武蔵大(6)、学習院大(5)、東大

(4)、千葉大、ICU、和光大

(各3)、都留文科大、慶大、清泉

女子大、立教大(各2)、筑波大、

東京外語大、東京工大、一橋大、

山梨医科大、青学大、カリフォル

ニア大、杏林大、国学院大、淑徳

大、中大、東洋大、日本女子大、

法大、明大、明学大、早大(各1)、

その他(3)

◇

近年、女性の社会的地位の向上

に伴い、日本でも男女の問題が急

速に社会的関心を呼ぶようになっ

てきた。自明とされてきた様々な

伝統的な価値観が大きく揺れ動く

中で、今や「男と女」の新しいあ

り方を問うことは、われわれが自

己のアイデンティティを鍛え上げ

てゆくことに直接繋がっている。

不定形な文化的状況の中で、人間

の存在を規定している基本的条件

の一つである男女の問題を考え直

すことは、また自己の新しい生き

方を模索することでもある。

もとより、男女をめぐる問題へ

のアプローチの仕方は様々であり

うるが、今回は「人間は男か女で

ある」という当たり前の事実を自

覚的に捉え直し、両性の本質その

ものを理解することに焦点があて

られた。

そのために、特に医学・生物学

的見地から性差の事実を確認した上で、文化人類学、比較文学・比較文化の視野から、異なる文化を背景とした男女のイメージを浮き彫りにすることによって、男女の本質を鮮明化する方法がとられた。

ある参加者の感想に示されるように、「男と女の問題は、普遍的な問題でありながら、なかなか日常の場で率直に語り合うのが難しいのが実状である」。その意味でも、参加者が、それぞれの問題意識を持ち寄ることで相互に刺激し合い、真剣に語り合う場がここに成立したことは喜ばしい。このセミナーの企画・運営の労をとられた青柳、杉田両氏をはじめとして、指導していただいた諸先生に改めて厚い感謝の意を表したい。

◇

「男らしさや女らしさは、文化や時代が形づくられるものであり、男女の間には本質的な差はないのか。また、もしあるとすればそれは何か」。初日のプログラムは、開講の挨拶の中で杉田氏の提起したこの問いをめぐる共通セッションからスタートした。以下は、各指導教授による発題の要点である。

▼綾部恒雄氏

「どの文化も、それぞれ男と女はどうあるべきかについての定まった考え方を持っている」。人間は各々の文化の中で育てられてゆくプロセスを通して、気づかないうちに男らしさ女らしさを身につけてゆく。この「らしさ」と肉体的・生物学的に条件づけられた「男性」と「女性」が、どのようなクロスするかがポイントである」

▼片倉もとこ氏

「イスラームは宗教としてだけでなく、生活全体に関わる一つの文化体系として捉えられなければならないが、そのような文化的背景の中で男と女のあり方は、どのように描かれてきたのか。日本とは非常に異なった文化を持つイスラーム社会をなるべく具体的に身近に感じてもらいながら、その中からわれわれが学ぶべきことがないかを話し合ってみよう」

▼亀井俊介氏

「アメリカ人の人間関係の基本は、人間同士が互いに「ストレンジャー」だという点にあり、この前提のもとに男女の問題もでてくる。日本のように地縁や血縁などによる結びつきがないので、見知らぬ人同士の男女は、自らの枠組をしっかりと持たなければならず、基本的に両者の関係は常に緊張している点が重要である」

▼杉田弘子氏

「ヨーロッパ人がその文化を作りあげてゆく根底には、禁欲主義的なキリスト教倫理があった」。そこには一種の性恐怖があり、性を非常に忌むものと考えられている。近代に至るまで延々と続いている。ヨーロッパ文化は、宗教とエロスの葛藤と相克の歴史として特徴づけられるが、そこでは「モラル」との闘いが大きなテーマとなっている」

◇

二日目は午前中のセクシオン演習に続き、昼食後に産婦人科医である岩崎寛和氏による全体講義が配された。氏は、「男女の相違は文化的に作られたものであり、生まれつきのものではない」とする

主張に対して、「医学を専門とする立場からいえば、男女は本質的に違う動物である」と指摘。特に医学生生のために作られた豊富なスライドを使用しながら、医学的な性別判定基準や男女の性差出現のメカニズムについて詳説され、生物学的レベルにおける両性の本質的な相違が明らかにされた。

「人間は元来、どちらにもなる素質を持っており、男になるか女になるかは一方に転ぶようなもので、微妙なタッチの差というように感じる」（青柳氏）との感想に示されるように、参加者一同は、一人一人が男と女に生まれついた生命の不思議さと、そのことの意味を改めて考えさせられたようであった。

◇

続いて、交友館にてお茶を飲みながら歓談した後、作家の安岡章太郎氏を囲んで、指導教授全員の参加による座談会が催された。はじめに安岡氏が自らのアメリカでの生活経験を披露されながら、人間の差別意識について以下のような問題を提起された。

「われわれの差別意識は、性的な関心と非常に近いところにあるのではないか。お互いに人間としては同じであるべき者同士が差別し合うのは、意識の非常に深いところで、何か大変深刻な人間的興味を持ち合っているからではないか」。飛躍した言い方になるが、その点、男女の間にある差別がすべての差別感情の根本なのではないかという気がする」

氏の発言に対して、フロアも交えて、人種差別と性的差別の関

(次ページ4段目へつづく)

法人ニュース

昭和59年度第2回

共同セミナー委員会

84年10月22日

東京ガーデンパレス

〔出席者〕 岡宏子、小田晋、阿部謙也、尾本恵市、小浪充、田中義久、江沢洋、戸沼幸市、青柳清孝、栗原彬、杉田弘子、鈴木和子、竹内啓、中西進、室田武（敬称略）

『新版『利用者の手引き』が完成』

「新感覚でハウスのイメージを表現したい」。これが部内の広報委員会のメンバーが自らに課した課題であった。

約一五年間、『利用者の手引き』は「初代」の原型に何回かの改編が加えられて、大いに活用されてきた。宿泊施設の紹介とともに、「学問と心と自然と」をうたい上げるハウスのイメージ作りに大いに貢献した。が、色彩豊かでグラフィックな世界に生きている最近の大学生諸君には、地味にすぎるだろう。

こうして83年秋に着手した作業は、日常業務の間隙をぬって少しずつ、またある時は集中的に進められ、約一年を要して完成にこぎつけた。

使用した写真の多くは『建築文化』から借用させていただいたが、各々が個性を主張する建物群は、作業の過程で人間の側に改めて建物に向かう姿勢を問いかけて

本年度第2回委員会は、前記一五名の委員に、ハウス側から中川館長、企画室スタッフ三名が出席して開かれた。

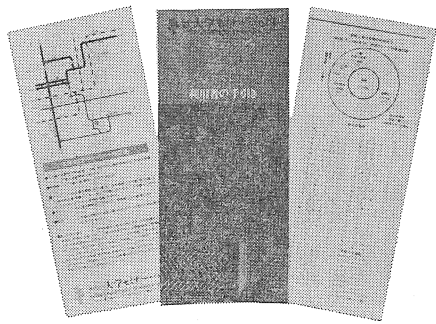
議事はまず、第5回大学院共同セミナーの実施報告、第129～132回大学共同セミナーおよび第7回大学合同セミナーの準備状況報告がそれぞれの運営委員から行なわれた。

続いて協議に移り、主として来秋に予定されている開館20周年記

くるようであった。

新版では、キャンパス全景がカラーイラストの鳥瞰図で紹介されており、構内案内にも利便を供して来泊者に好評である。

新版完成を契機に利用促進を重点的に行なっている。各大学のゼミや各種研究会をご紹介下さい。



念セミナーの企画を中心に活発な意見の交換がなされた。

以下は決定をみたテーマ（内容）および運営委員である。記念セミナーについては、準備委員会を充足させ、記念行事の一環として講演会の企画なども併せて考えていくことになった。

○第6回大学院共同セミナー（6月28～30日）

「現代社会における合理性」（田中氏）

○開館20周年記念セミナー（10月25～27日）

「情報と社会」*（竹内、尾本、小浪、岡、江沢の諸氏）

○第134回大学共同セミナー（12月13～15日）

「エントロピー」（室田・江沢氏）

○第8回大学合同セミナー（11月15～17日）

「都市と建築」（戸沼氏）

●運営委員会

第5回 9月21日／当ハウス

サービスの向上について

第6回 10月19日／大隈会館

収容力増加対策について

第7回 11月28日／当ハウス

ハウスの将来ビジョンについて

●寄贈図書

84年1～4月

「金融経済」203・205

金融経済研究所蔵

「社会学論叢」88、「安楽死論集」

「アジアの友」1～2月号

笠原正成蔵
アジア学生文化協会蔵

（前ページからつづく）

わりの問題、差別と区別はどう違うのか、日本人の差別意識と被差別意識、などの点を中心に活発な議論が展開された。

差別感とは、嫌悪感と魅力とが複雑に入り組んだ感覚という氏の作家としての洞察力は、人間の意識の奥底に潜む「差別意識そのもの」に迫る重要な示唆を聴衆に与えた。

◇

最終日はセミナーの総括として、学生の自主運営による全体集行なわれた。レポーターによって、各セクションの演習報告がなされた後、男「らしさ」と女「らしさ」、男女の結婚観の相違、家庭や社会における男女の役割分担の問題などをめぐり、自由な意見交換の場が持たれた。

中でも、「男の心情はかなり保守的である。しかし、仮りに、女は家庭に在るべきだと思っていても、今や男はそれを正当化する論理を持っていない。自分のロジカルな部分と深いところにある非常に保守的なものの乖離に苦しんでいる」などの男性的率直な発言は、女性の社会的進出の現実を目の前にしてとまどう男性の本音であるとともに、新しい経験を通して新たな視点を形成しようとしている真剣な姿勢を示していたように思われる。

現在の「男性優位」の社会の中

「創意と交流」

関西学院大学総合教育研究室蔵
「日本女子大学附属高等学校30年史」
同高等学校蔵

では、とかく女性は「男がタバコを吸うから女も吸う式」の「男」を基準とした論理に乗っかって行動しがちである。それに対して、女性が男の論理に呑み込まれることなく、自らの特性に基づいた女性なりの論理を構築してゆくことが、結局は男性との平等を実現する道ではないか（綾部氏）、「作り出した女性の論理を、女性だけが納得し、その論理の中に埋没してしまっているのではなく、男の論理で動いている社会の中で生きながら、男を「説得」してゆく努力をしなければならぬ」（片倉氏）との指摘は印象に残った。

今回のテーマである男と女の問題は、過去から未来へかけて絶えることなく続く永遠のテーマである。確かに、社会的不平等等は早急に改善されなければならないのは当然だとしても、それは正のためには単なる対症療法的な方法にとどまることなく、「われわれの将来にどのような男女のあり方が望ましいのか」というところまで突っ込んだ議論が必要であろう。

「男と女はどこまで同じであり、どこから違うのか。おそらく、そうした見通しを欠いたところでは、真の「人間形成」に寄与するような男女のヴィジョンを描くことはできない。その意味でセミナーが、男女における「可変部分」と「不変部分」を改めて考察し直し、両者を見極める格好の機会を提供しえたことには幸いである。

「ケルトの神話」

井村君江蔵
「大学論集」12、「Comparative Approaches to Higher Education」

◆千人会

84年8～11月

◇新しく会員となられた方々

4名(第75回報告(申込順))

C 名城大学教員 杉山 清殿

C 国学院大学就職部顧問

C 東京経済大学学生部事務室長

手島 修蔵殿

B 東京理科大学教授

沖塩莊一郎殿

◇会費ありがとうございます

石川馨、奥田夏子、三輪公忠、菊

池雄二、村上光雄、杉山清、山本

澄子、伊藤清子、稲田拓、鹿島健

次、高村象平、大吉芳彦、三宅彰

矢部章彦、十代田知三、浅井邦二、

石川淳志、内山尚三、滝幸三郎、

橋本研一、田村恭、花島重春、小

田切松義、岡本哲治、原島幸太郎、

岡本剛、加藤栄一、伊藤一松、佐

野幹夫、秋山虔、石井竹松、土田

美芳、柳下綱道、市川博、米山弘

山本武彦、村松暎、福山仙樹、荻

原洋太郎、山口重克、宮野三郎、

山本芳夫、岡岡昭夫、渡辺昭夫、

平井久、上田初子、原誠、横田澄

司、池田貞雄、田中弥寿雄、小林

祐子、志賀英、原田行男、中川重

雄、井上孝、小田宏、太幡祐己、

牧野親寿、白濱謙一、押田勇雄、

佐野晃、片山清一、松村信治郎、

岡村文子、西村善四郎、藤永光之

若槻泰雄、正田亘、新井勝紘、松

平文明、増田茂樹、片山寛、下田

弘、井手久登、村上陽一郎、熊田

慎宜、椿弘次、市川節子、朽津耕

三、都留春夫、武澤信一、小和田

恒、横山宏、高橋彰、井深淑子、

石村善助、島袋嘉昌、尾形典男、

宮坂宏、松尾登、岡村甫、松田徳

一郎、千葉正士、五十嵐香、高村

多賀子、町野朔、谷俊治、武藤英

輔、池上秋彦、楢林博太郎、平野

健一郎、尾形彌、古屋野正伍、岩

崎不二子、安嶋彌、宮川透、松田

武彦、小田切美文、吉利和、大東

百合子、田村康男、朝倉孝吉、伏

見弘、関口富左、加藤五六、小堀

桂一郎、坂本義和、神戸倫樹美、

後藤米夫、関本昌秀、鞍馬菊枝、

飯田経夫、阿久津喜弘、鈴木忠義、

伊能敬、大沢綱一郎、岡野澄、菊

地昌典、河野恵、田端光美、早弓

惇、木村富夫、末松安晴、平野敬

一、森恭三、中島文夫、川村亮、

小林善彦、脇田良一、高橋泰蔵、

小林忠義、沖中重雄、平澤茂一、

松田千鶴子、今井淳、安達義明、

日高精二、川原啓美、大村政善、

塩見利夫、松本健次郎、矢吹晋、

後藤光一郎、神田信夫、矢吹晋、

宮野彬、小川芳男、大須賀政夫、

久保良雄、平澤興、田村猷、関口

利男、堀光男、小田中敏男、三村

卓雄、布川角左衛門、野田良之、

板垣與一、宮田登、岡茂男、本間

正人、江尻美穂子、宇都栄子、井

上勝也、新田悟、矢野喜久子、大

竹誠、松岡八郎、森井真、白井常、

大貫一、川原栄峰、貝塚爽平、森

岡清美、福田隆義、高橋三郎、坂

野親司、磯部浩一、小田滋、鶴岡

義一、戸田盛和、佐原六郎、山田

耕司、伊藤成彦、堀信一、稲垣寛、

上妻精、大坪秀二、秋田成就、飯

島宗享、八木江里、佐々木克己、

神山妙子、満尾寿男、宇野重昭、

久武雅夫、鈴木喬、鳥居泰彦、笹

島恒輔、高野雄一、米山哲夫、高

山成雄、山本大二郎、宮崎繁樹、

前田陽一、山本登、杉澤新一、伊

藤玄三、小川捷之、松田稔子、山

本よし多、東寿太郎、井関利明、

武者小路公秀、中村孝孝、バッケ

ス・ジャン、祖父江孝男、中沢正

和、米満澄、田中外次、小林淑郎、

竹内喜代司、久場篤子、中井虎一、

浅見一羊、梶木隆一、金子保、西

野万里、清水護、吉武泰水、水野

伝一、飯野利夫、川鍋正敏、吉沢

英子、八戸信昭、国分康孝、宇野

義方、木下是雄、松瀬貫規、高橋

七五三、竹内与之助、大神田正義、

岡島眞理、山下幸夫、田原虎次、

青木生子、木村久男、大地羊三、

森繁雄、山岸健、堀江忠男、石川

正一、小松八郎、納富照枝、速水

佑次郎、石川明、勝木保次、阪田

正三、森田信義、田中正人、福島

正久、太田時男、矢澤修次郎、松

元文子、城謙輔 (敬称略)

広島大学大学教育研究センター殿

「新しき村」1～5月号

「政治経済史学」210 彦由一太殿

「紀要」15

日本大学教育制度研究所殿

「現代詩研究」310 現代詩研究所殿

「アメリカ外交史研究」

学習院大学庶務部殿

「早稲田フォーラム」43

早稲田大学総長室広報課殿

「現代を思索する」診断・世界経

済と日本の展望」堀江忠男殿

「18世紀ドイツ戯曲のブランクウ

「アース」 宮下啓三殿

「人文論集」22、「早稲田法学」58

早稲田大学法学会殿

「破壊されるアジアの熱帯林」

飯田能子殿

「平和は歩いてこない」

尾形 憲殿

「宮沢賢治—存在の祭りの中へ」

見田宗介殿

「労務管理」

平野文彦殿

「国際協力」4

八王子国際研修センター殿

「紀要」14

早稲田大学システム科学研究所殿

●寄付金報告

84年6～11月

△教育プログラム資金▽

第12回10大学合同セミ

ナー参加者一同殿

国際フォーラム運営委

員阿部美哉殿

第7回大学合同セミナ

ー参加者一同殿

第129回大学共同セミナ

ー参加者一同殿

△一般寄付▽

津田塾大学国際関係学

科フレッシュマンキャ

ンブ殿

東京YWCA専門学校

英語科一同殿

お茶の水女子大学

新人生セミナー殿

東京理科大学クライシ

ス・イクゼミ一同殿

明星大学通信教育学部

夏期スクーリング学生

一同殿

アース

宮下啓三殿

早稲田大学法学会殿

飯田能子殿

尾形 憲殿

見田宗介殿

平野文彦殿

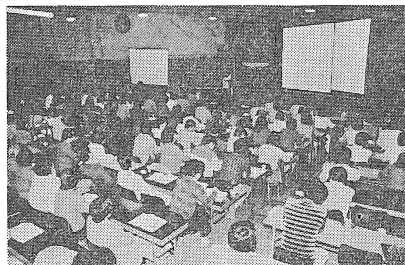
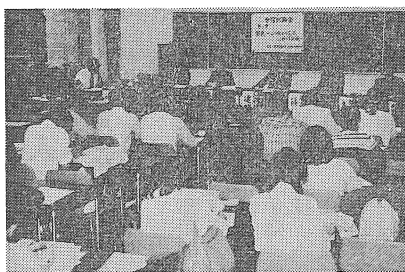
八王子国際研修センター殿

早稲田大学システム科学研究所殿

事業部だより

'84年8・9・10・11月

夏と秋のキャンパスから



①慶応義塾大学「合宿討論会」——難民問題を考える(大学院セミナー館)

②小児神経学セミナー——全国から医師・院生が参加して(講堂)

例年になく猛暑の夏であった。残暑も酷しく、9月に入ってから4度という異常気温が八王子で記録された。にもかかわらず、この丘は例年同様、夏の休暇を利用して熱心に研修を続ける人々で、連日賑わった。全国規模の集会、国際集会在三泊から九泊。これに中央・明星両大学のスクーリングに全国から参集する「通教生」計八四名の長期滞在を加え、8月は年間の最盛期。9月中、各大学夏休み終盤の合宿が集中し、月末近くまで活況を呈した。

●夏の常連、新顔から
夏休みの全国的集会には、一〇年以上もの「常連」に混じって、今年は「新顔」のグループも少なくなかった。前者には春・夏・冬の通算利用が四〇回におよぶ文学教育者研究集団がある(8月6日の原爆記念日に広島からの参加者が「真理の鐘」を点鐘するのも定例行事となった)。英語教育協議

えての全国的な研究集会比较的多い。しかし、研修に絶好のこの季節に個別大学の利用が(週末・祝祭日を除き)ぐっと少なくなるのは、大学特有の事情(学期ならば、学園祭・学会など)からとはいえ、残念なことである。この時期の積極的な活用をぜひご検討願いたい。

【夏・秋4ヵ月の利用状況】

	グループ数	宿泊延数	定員比
8月	一一一	六、九二一	八三
9月	一五七	五、四二九	六七
10月	七七	二、七九六	三三
11月	七九	三、〇六五	三八

●個別大学の合宿から
夏から秋にかけて繰り広げられた各大学のゼミナール合宿と指導教授の各名前は、別掲の「利用状況」でご覧いただきたい。8月の東京理科大学「クワイックゼミ」は、大澤綱一郎教授と卒業生が二年も続けてこられた年に一度のこの丘での「再会合宿」である。千葉大「医用電子工学研究会」は学生のサークル活動で八回目、七八名が三泊。三年目の一橋大「外国人研究留学生社会科学基礎セミナー」は、関西地区からの留学生を含む二二カ国・二四名が四泊して現代日本の政治・経済・社会についての全般的な基礎知識を学んだ。

9月の法政大「技術連盟」、津田塾大「学内ITC」(六泊)、東海大短大「情報処理工学コース」も恒例の集会。10月には会員校三大学の医学部(附属病院)が相次いで職員研修をされた。慶大(主任クラス)、杏林大(看護婦主任)、

マレーシア人企業家訪日研修団 ハウス印象記

It has been a wonderful 7 days in Japan and the place is the most appropriate area to stay for first-timers from overseas, especially Malaysia because the trees and flowers remind us of home.

The IUSH is a home away from home.
Shaari Nor
Manager, Construction Co.

In order to restore the tension of thinking or problem, the IUSH is the best place for relaxation, whereby the location, the natural beauty and the environment itself play important part to give a purely peaceful life and freedom.

Adil Adikara Manurong Bin T. M.
Abdul Rahim
Manager, Engineering, Service & Trading Co.

そして一九年目の順天堂大(院内各部署一〇名の「業務改善セミナー」)である。順天堂は来秋20周年記念セミナーを実施される。11月には近年加盟された二つの会員校、東京医科大(学生・教授相談会)と淑徳大(社会福祉学科六ゼミ合同合宿)の来泊を迎えた。

●二つの「学内共同セミナー」

立大文学部の「集中合同講義」(六六名うち教職員七名)と慶大大学生生活懇談会主催の「合宿討論会」(四二名うち教職員一名)は、学内交流を目指し、専門の学科をこえた総合的視野のもとに企画されたセミナーである。前者は48年以来連続一二年目の恒例行事で、今年も夏休み明け直前の9月中旬に四泊五日で開催された。今回のテーマ「見える都市、見えない都市」に因んで、参加学生の一人大城信哉君がハウスでの感想(別掲)を寄せてくれた。なお、

●三つの「建築ゼミ」

10月の週末、この丘の建築群に学ぼうとする三つの建築ゼミが集中した。早大大学院(一九名)、東京理科大建築計画ゼミ(五〇名)、そして日帰りで見学で来館した東洋大建築学科(一三六名)。東京理科大・沖塩庄一郎教授は、53年以来(このところ年に二回)「大学セミナー・ハウスの建築群を見て良い建築とは何かを考える」をテーマとする建築計画ゼミ

ヘッドな日程の合間に毎年遠足が組まれるが、今年はディレクター前田愛教授の案内で全員が「絹の道」などハウス周辺の「歴史散歩」を楽しまれた。後者の慶大「合宿討論会」は10月中旬の週末に行なわれ、今回のテーマ「難民——この我々の文化に対する試練——」について、上智大・緒方貞子教授ら学外からも講師を招いて議論を深めた(写真①)。

を実施してこられた。この丘の自然と建物を愛し、『ハウスの心』を大切に思われる方の一人である。本号の「わたしたちの合宿」(11ページ)では沖塩教授に同ゼミ恒例の合宿をご紹介いただいた。

●「大学連合」の諸集会

夏から秋は大学の枠をこえた集会所が目立つ。ハウス主催の三つの教育プログラムや慶大学生相談室主催の「大学合同エンカウンター・グループ」(会員校五大学)、エスベラント学習の「国際語教育協議会」(同七大学)、共同セミナーから生まれた七年目の「現象学・解釈学研究会」(一七大学)、

セミナー・ハウスの精霊に

立教大学文学部
キリスト教学科三年

大城 信哉

嘘みいたいな暑さが報じられていたのですが、行ってみるとさすがに寒かったのは、単に9月中旬にさしかかっていたからだけでしょうか、いいえきっと都市が暑すぎるのです。それは人が多いから、動力がたくさんあるからだだけでなく、都市という概念が今まさに、流行っているものだからでしょう。流行っているという自意識が都市をあつくしているのです。

ところで、流行に限らず神話の渦中にいる者には神話をみることができません。ちょうど歌手が自分の歌を聴けず、俳優が自分の舞台を観ることができないのと同じように。論ずるためには対象との適当な距離が必要です。私たちの

「微分力学系シンポジウム」(八大学)など。二年ぶり一回目、小児神経学会主催の「小児神経学セミナー」(一五四名)(写真②)、また大学職員の研修では、ハウスで四度目の「留学生担当者研修会」(二三八名)と恒例の「厚生補導事務研修会」(七二名)など、いずれも全国各地の大学からの参加を得た集会である。

●五つの訪日研修グループ

この四ヵ月、ハウスは左記五つの訪日グループの来泊を迎え、それぞれに国際交流の場を提供することができた。8月の「日米学生国際親善プログラム」(三五名)

大学は池袋にあって常日頃都市の中で生活しているものですから、充実した都市論ゼミを行なおうとしたら、少なくとも都市の中心部を離れる必要があります。そうでなかつたなら熱に浮かされたような都市礼讃、あるいは嫌悪に終始してしまふことでしょう。

セミナー・ハウスは八王子にあるので、うってつけだった訳ですが、良かったことはじつは地の利だけではありません。迷うほどの広さと迷路のような構造、外来者を試すような眼のオブジェに代表される意味付けの多彩さ、面白さ、そしてこれは偶然なのかもしれないが、議論に熱くなりながらも私たちに客観性を与えてくれるためかのような涼しさ。もしかしたらセミナー・ハウスの地霊のなせるわざだったのかもと思えます。

都市には都市のauraがあるように、セミナー・ハウスにもその

は、YFU交換留学生としてこの夏二ヵ月間来日した米国高校生と日本側高校生・大学生とに生活交流体験を持たせようと、東京外大・中嶋嶺雄教授(ハウス国際プログラム前委員長)が企画、指導され、同研究室およびゼミの学生諸氏が、お世話を受けたもの。週末の一泊二日ではあったが、親善セミナー「日本から見たアメリカ、アメリカから見た日本」のほか、夕食時の交歓会(九グループ二四〇名)や遠来荘での茶道体験などで交流を深めた(写真③)。

9月の「マレーシア人企業家養成プログラム」は、産業能率大がマレーシア政府の要請を受けて実

精霊が住んでいるでしょう。

新宿から電車で行くと(他の道で行く人も多いでしょうが)、もうプログラムに参加している自分が気が付きます。そう、精霊の主催する祭ります。ふだん接している友人といつもより多少は知的な会話ができたのも、私たちが五日にわたるものがたりの登場人物にな

っていたからに違いありません。私たちのディレクターは前田愛先生でしたが、本当の演出家は姿をみせないものです。

都市と違っているこのパフォーマンスは客観視することができませんが、登場人物としてはそこは仕方ありません。第一、出演するほうが面白いのですから。

姿をみせない地霊に、そして、裏方をつとめてくださったセミナー・ハウスの職員の方に感謝いたします。心から。

(注)立教大学部会合同開催「見える都市」見えない都市(9月14・18日)の参加者。

施したもので、日本の企業と経営に関するセミナー。参加者は同国の企業界の中堅指導者二五名(写真④)で、約三ヵ月にわたる滞日研修の最初の一週間をハウスで合宿、日本語訓練と日本の文化・社会へのオリエンテーションを受けた。酷しい残暑の中での研修であったが、来日早々のハウスでの生活や在泊者との交流は日本研究へのよき導入部となった模様。参加者が寄せた感想の一部(別掲)を紹介したい。

日本政府のASEAN青年招へい事業「21世紀のための友情計画」による訪日グループでは、7月にインドネシア教員グループを迎えたが、引き続き8・9の両月には二つのシンガポール公務員グループ(日本側と合わせて七四名と六一名)を歓迎した。ともに滞日一ヵ月の中の週末二泊三日の来泊ではあったが、成蹊大・広野良吉教授(ハウス国際プログラム委員長)による講演「日本・シンガポールの経済発展における行政の役割」と討論、スポーツ、パーティなど共同の体験を通して、両

国の同世代の公務員や青年代表が相互理解を深めた(写真⑤)。今年度準協力会員校として加盟された東京工業高等専門学校が、8月に韓国専門大学生(二二名)、10月にオーストラリアのギップスランド校の教師・学生(一六名)を招へい、前者は三泊、後者は六泊し、同校とハウスを拠点に「日韓」「日豪」の交流プログラムを展開した。

●さまざまな交歓風景

全国各地から、そして海外からの来泊者を迎え、食堂や交友館などでさまざまな形の交歓風景が繰り広げられた。前記米国高校生、ASEAN諸国の訪日団、オーストラリア学生らが食堂で紹介された。「中秋の名月」には恒例の月見ダangoを供して交歓、季節の情緒を味わった。遠来荘では毎月第四日曜日後「茶道教室」が開催され、内外の来泊者一八グループ計一六〇名が民家見学を兼ねての茶道体験と地元奉仕者との交流を楽しんだ。

●利用状況

* 11月2日回利用
* 11月3日回利用
日帰り利用を除く

8月

(11グループ、六、九二一人)

青山学院大学教授 岸 英朗
成蹊大学教授* 宇野 重昭
東京理科大学教授 山口 弘之
学習院大学音楽愛好会リコーダーゼミ

日本大学社会科学研究会
大妻女子大学教授* 千羽喜代子
東京学芸大学教授 小川 再治
東京学芸大学教授 小林 弘
青山学院大学教授 吉田 靖彦
日本大学和歌文学研究会
東京農業大学短期大学講師

東京農業大学教授 滝田 聖親
杉野女子大短期大学講師 西郷 光彦
東京理科大学教授 大久保正健
筑波大学大学院水文学研究室 伊丹 邦夫

東京工業高等専門学校(韓国専門
大学生研修)
中央大学通信教育部
東京理科大学教授 大澤綱一郎
法政大学宗教社会学研究会
東京大学 Fantasy Group
明治学院大学マスコミ講座
東京学芸大学天文研
明星大学通信教育部
早稲田大学英語会
芝浦工業大学教授 十代田知三
一橋大学外交勉強会
東京女子大学教授 秋山 虔
千葉大学医用電子工学研究会
東京都立大学教授 石村 善助
慶応義塾大学加藤寛研究会
東京学芸大学生活協同組合
津田塾大学助教 太田 香
日本大学経済史研究会 柴若 光昭
日本大学講師 井上 和子
国際基督教大学教授 真貝 健一
埼玉大学助手 真貝 健一
東京学芸大学英語科 ITC
横浜国立大学建築計画セミナー
東京家政大学ジョイント・ワーク
ショップ
東京電機大学流体科学講演会
東京都立大学助教 渡辺 敦
東京都立大学講師 山川 仁
青山学院大学教授 羽田 三郎
東京学芸大学教授 永野 賢
青山学院大学助教 関 英昭
立教大学助教 服部 正治
芝浦工業大学助教 大塚 正久
慶応義塾大学英語会 馬場 修一
成蹊大学助教 植村 栄治
学習院大学助教 高橋 利宏
独協大学教授 林 俊一
武蔵野音楽大学音楽教育専攻ゼミ
東電学園大学夏季ゼミナール



③日米学生親善プログラ
ム(中央が中嶋雄氏
(ようこそ広場))

国際商科大学教授 安藤 端夫
都留文科大学講師 山口 和孝
国学院大学教員志望者講習会
玉川大学教授 田中 宏
芝浦工業大学柏高校英語クラブ
東京都立青梅高等学校
日米学生国際親善プログラム
日本経営工学会アーゴノミクス研
究部会
日仏教育文化交流振興会(大学生
ITCフランス語科)
湾岸研究会
新薬学研究者技術者集団
サンケイインターナショナルカレ
ッジ
建築設備耐久性研究会*
東京府中ロータリークラブ
文学教育研究者集団
東京都高等学校英語教育研究会
子どもと作る生活文化研究会
朝日カルチャーセンター***
新潟大学聖書研究部同窓会
恵みバプテ
スト教会
南浦和教会
国際交流サ
ービス協
会(アセ
アン諸国
訪日研修
英語教育協
議会
日伊協会
(伊語夏
季特別集
中講座)
日本私立小
学校連合
理科部
モデル・ラ
ンゲージ

・スタジオ
日本流星研究会
国分寺新生教会
日本作業療法士協会
京王百貨店
東京矯正教育学会
日本電気
キヤノン平塚21研究室
小西六写真工業
カッティングハウス・アンアン
京王プラザホテル
日本フッドサービスチェーン協会
積水化学工業多摩ハイム営業所
経営システム研究会
科学万博「つば」85「鉄鋼館」合
同合宿研修
〔個人利用〕
中山テニスクラブ 石井 聡
名城大学講師 杉山 清
明治学院大学教授 秋山 智久
文教女子短期大学助教 笠井 勝子
■9月
(157グループ、五、四二九人)
一橋大学外国人研究留学生社会科
学基礎セミナー
東京都立大学教授 桐谷 維
東京理科大学教授 国分 康孝
学習院大学教授 児玉 久雄
東京大学教授 木村尚三郎
東京大学言語研究会
中央大学生協同組合***
日本大学人口研究所高等教育問題
研究会
日本大学講師 岩井 肇
武蔵大学教授 私市 保彦
国際基督教大学教育哲学研究室
大妻女子大学助教 森住 衛
千葉商科大学社会科学ドキュメン
テーション研究会
東京都立大学助教 井堀 利宏
早稲田大学理工学部英語会



④マレーシア企業家訪日
研修団

青山学院大学
教授 神山妙子
明治学院大学
教授 増田 茂樹
東京女子大学
教授 宮川 実
東京外国語大
学講師*
高橋 正明
法政大学技術
連盟グルー
プリーダー
スキャン
明治学院大学
教授*
逸雄
立教大学民衆
館
青山学院大学教授 中央大学教授 長谷川幸生
青山学院大学助教 学習院大学教授 門脇 卓爾
日本大学教授 早稲田大学講師 深沢 実
共立女子大学雑誌部 明治大学教授 明治大学教授 森山 正彦
国際基督教大学助教 立正大学教授 立正大学教授 厚東 俊雄
慶応義塾大学英語会* 早稲田大学教授 早稲田大学教授 浅井 邦二
千葉大学教授 早稲田大学助教 早稲田大学助教 湯沢 欽史
立正大学教授 中央大学経済学会 法政大学経済学会 慶応義塾大学神谷不二研究会
中央大学安達ゼミ・司法研究会合
同ゼミ
駒沢大学教授 阿部 弘
駒沢大学講師 谷口 洋志
武蔵大学教授 村田 晴夫
中央大学教授 岩尾 裕純
駒沢大学助教 鈴木 幸毅
一橋大学助教 武隈 慎一
東京学芸大学助教 足立美比古
東京経済大学助教 島田 和夫

明星大学教授 木村 久男
東京都立大学助教 小寺 彰
明治大学教授 一泉 知永

中央大学教授 村越 邦男
東京女子大学教授 山本 幸一
聖心女子大学国際問題研究会

東京農業大学作物学研究室
東京女子大学教授 金子 宏
東京女子大学生活協同組合

◆わたしたちの合宿◆

年に二回の建築計画系ゼミ

ハウスの建築群を教材として

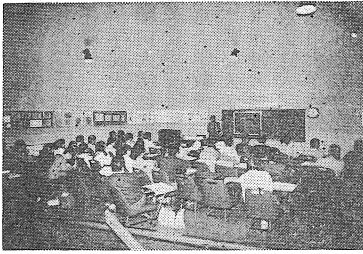
東京理科大学教授 沖塩 一郎

東京理科大学工学部建築学科では、私の研究室を中心に、このところ年に二回大学セミナー・ハウスのお世話になっている。

◆秋の建築計画ゼミ◆

昭51年に新設された工学部第二部で昭和53年から私は非常勤講師として三年生に建築計画を教えることになった。屋敷がながらの二部の学生は、友達や先生と建築を見たり、語り合う機会が少なくこのことから、合宿ゼミを思いたち、設計製図担当の先生がたにもお話ししたところ賛同いただき、その年の秋、第一回の建築計画ゼミを行なった。

セミナー・ハウスは、元早稲田大



12回目を迎えた合宿ゼミ
(中央セミナー館)

学教授の故吉阪隆正先生ご設計の建築群で、建築を考える上での話題のネタに事欠かない。昨年までの六回は、ゼミのテーマを「大学セミナー・ハウスの建築群を見て良い建築とは何かを考える」とした。第一回の時、一職員の方から施設の説明があり、「皆さんは建築学科の学生さんですね、ユニッツが外気に面している、ビル・タイプに比べ暖房費がかかって困る、設計のとき省エネも考えて下さい」「毎日毛布カバー・シートなどの取替えにおぼさんたちが大きい袋を背負って斜面を上ったり下ったり大変です、設計時に完成後の運営のことも考えて下さい」との話があった。

建築を設計する時、省エネも完成後の運営のし易さも最重要のテーマである。しかし、もしセミナー・ハウスがビルタイプだったらわれわれは八王子まで来ないのではないか。自然の中にあのような建て方をしているから皆が集まるのではないか。この地で自分が設計するとしたらどうするか、建築とは何か、を考える上で、ハウスの建築群はまたとない教材である。

私はかつて別のグループでハウスの使用をさせていただいた時、設計者の吉阪先生にも来ていただき、どのような考えでハウスを設計されたかお話を伺ったことがあり、その時のテーマも学生たちに聞かせている。

学生たちは、ハウスの建築群の素晴らしさに感激するとともに、雨の日など袋を背負ったおぼさんが坂道で滑って転んで泥だらけになっているのを見て運営の大変さを実感し「山小屋に徹すべきだ、シート交換サービスに無理がある」との意見が出たり、「今時シート交換サービスなしでは利用されなくなる」など、毎年論議は尽きなかった。

吉阪先生の亡くなられた翌年は、U研究室の松崎義徳氏にお願いいただき、吉阪先生を偲ぶ会を催した。

今年は、少し趣向を変え、学生たちの夏休みの課題「好きな街のビジュアル・サーベイ」の作品をネタに「街並み」をテーマに討議した。屋間部の有志も参加し、先生一〇人に学生四〇人だった。終了後「できれば他大学、それも建築だけでなく文学部など他学部との合同ゼミの方が街並み論議の視点が広がるのでは」との意見が出ていた。

◆春の卒業研究ゼミ◆
私が昭和55年理科大の専任教授になってからは、毎年春に私の研究室の大学院生、一部と二部の卒業研究生、二部の卒業製作の指導教官と学生、の合同ゼミを行なっている。

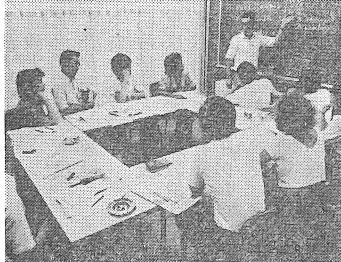
◆秋と春で、すでに二回ハウスにお世話になっているが、環境、建築群、サービスとも毎回新鮮な感じで、本当に素晴らしいセミナー・ハウスであると思っている。

東京大学教授 菊地 昌典
東京工業大学教授 黒沢 一清
早稲田大学教授 田村 恭
東京女子大学講師 森原 康子
大妻女子短大助教 萩住 衛
国士館大学講師 石川 博明
和洋女子大学助教 清川 英男
嘉悦女子短期大学茶道同好会
茨城キリスト教大学教授 小谷野邦子

聖和教会青年会
霞町教会
建築設備耐久性研究会
国際交流サービス協会(アセアン諸国訪日研修団)
経営システム研究会
アイワールド
富士フアコム制御
全損保日産支部青年婦人部
積水化学工業多摩ハイム営業所
富士電機

産業能率大学マレーシア企業家養成プログラム
成ブログラム
東洋大学教授 菅野 康雄
東洋大学教授 島田 悦子
国士館大学講師 北川 善廣
文教大学講師 広内 哲夫
高千穂商科大助教 梶原 明子
都留文科大学教授 和田 明子
相模女子大学翠葉会茶道部
空井健三先生ケース検討会
美学科研究室連合研究会
国公立大学獣医学協議会
日本ナチュラリス協会
朝日カルチャーセンター
カンパランド長老キリスト教会
国立西埼玉中央病院附属看護学校
高橋聖書集会
新日本文学会
牛込独立キリスト教会

小谷野邦子
東芝プロセスソフトウェア
東芝府中工場
アドア
小西六写真工業
航空宇宙技術研究所
日本航空電子工業
国際交流サービス協会(職員研修)富士ゼロックスオフィスサプライ「個人利用」
日本リフト**
杏林大学教授 金子ハツエ
横浜国立大学助教 相沢 忠一
中央大学教授 小泉 秀夫
日本リフト 三橋 文明
山崎特許事務所 小倉 増三
日本トラベノール 平井 安雄
矢部 広重



⑥「21世紀のための友情計画」——討論する日本とシンガポールの青年公務員たち(国際セミナー館)

東京大学教授 六本 佳平
明治学院大学助教 岡田 信弘
東京学芸大学生活協同組合 村田 晴夫
武蔵大学教授 村田 晴夫
日本大学文学部書道研究会
明治学院大学教授 清水 徹
法政大学不動産鑑定研究会 大津 悦夫
立正大学講師 佐野 晃
中央大学通教部学生会千代田支部
武蔵大学教授 佐野 晃
東京工業高等専門学校(日豪学生

交流

慶応義塾大学医学部職員研修
杏林大学医学部附属病院看護婦主
任研修

明治学院大学教授 宮野 彬

早稲田大学理工学部ESS
順天堂病院業務改善セミナー

東京大学教授 和田 英一

慶応義塾大学大学生生活懇談会

東京理科大学教授 沖塩 一郎

東京都立大学河村・高橋ゼミ

早稲田大学助教授 川原 榮峰

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

中央大学助教授 沼 正也

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

早稲田大学助教授 渡辺 仁史

東京理科大学教授 狩野 紀昭

青山学院大学体育連合会航空部

東海大学教授 師岡 孝次

学習院大学フランス会

学習院大学教授 川路 紳治

早稲田大学コンツェルト

明星大学教授 中田 重厚

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

早稲田大学助教授 飯島 宗享

建築設備耐久性研究会

日本フードサービスエー

会*

本技研工業

日本航空電子工業*

日電アネルバ

キヤタピラー三菱

関東共立ユニ

アイワワールド*

宇部興産住宅

積水化学工業

ユニ・ビー・ユニ*

日野動力

小西六写真工業

明和産業

キャノン中央研究所

京王百貨店

フランスベッド

富士鋁油

〔個人利用〕

東京都立大学助教授 大石 堪山

国士館大学講師 石川 博明

ティール・ジョー不動産 米山 哲夫

駒沢大学助教授 清水 卓

ワシントン大学学生J・ショール

東洋大学教授 堀 光男

11月

〔79グループ、三〇六五八〕

東京都立大学教授 長倉 康彦

上智大学スペイン演劇研究会

東京医科大学教授 鈴木 達男

法政大学助教授 柴田 良一

東京薬科大学臨床生化学教室

東京都立大学助教授 石井 昭

東京都立大学助教授 東 洋一

中央大学生協同組合

青山学院大学青山子ども会

中央大学教授 林 昇一

千葉大学助教授 武蔵 武彦

東京理科大学建築学科卒論ゼミ

淑徳大学杉山・千徳・金子・米

法政大学教授 松尾 太郎

立教大学教授 小本 浩

明治学院大学教授 水野 哲郎

杉野女子大学教授 武長 脩郎

中央大学教授 下村 康正

明治学院大学教授 清水 徹

東京都立大学助教授 東中川 徹

慶応義塾大学有賀・益田研究室

青山学院大学青山キリスト教学生会

慶応義塾大学助教授 石川 明

慶応義塾大学助教授 西野 寿一

明治学院大学助教授 上原 征彦

一橋大学教授 石 弘光

東京都立大学生物学ゼミ1、2年

東京都立大学生物学ゼミ3、4年

武蔵大学教授 村田 晴夫

東京純心女子短期大学美術科卒業

修養会

国士館大学建築学科意匠ゼミ

東北学院大学ボディビル部

日本ルーテル神学大学修養会

日本女子大学附属高等学校高校生

活研究ゼミナ

東京大学教育学部付属高等学校研

究開発推進委員会

第6回国際フォーラム

第7回大学合同ゼミナ

放電研究グループ

厚生補導事務研修会(文部省)

第129回大学共同ゼミナ

日本科学者会議

現象学解研究研究会

微分力学系シンポジウム

日本小児神経学会

早稲田大学システム科学研究所

宮沢賢治読書会

建築設備耐久性研究会*

国際ロケット第27地区ロータ

朝日カルチャーセンター

日本キリスト教会東京中会青年部

アイワワールド*

女性建築技術者の会

日本電機

カシオ計算機

沖電気工業

京王百貨店

阿部興業

東芝府中工場

日本水産*

積水ハウス*

日本フードサービスチェーン協会

ジェイ・エム・アール東京

東芝小向工場

オリエン時計

千野製作所

富士鋁油

雪印種苗

〔個人利用〕

上智大学教授 本間 英世

国士館大学講師 石川 博明

学習院大学学生 岩崎 直美

中央大学学生 清水 容一

多摩美術大学講師 勝間ひでとし

東京大学助手 尼ヶ崎 彬

●編集後記

昨年8月から11月までを収載

し、合併号にして新年第一号をお

届けします。

「一九八四年」は様々な話題を

提供して過ぎ去りましたが、八五

年は当ハウスにとってそれ以上に

特別な年となりました。7月5

日の開館記念日でハウスは満二〇

年を迎えます。

国公立大学が参加して創った

民間施設であるハウスの歩みは、

「大学を開く」実践の歴史でもあ

りました。「セミナー・ハウス」

が設立の理念を体する全くの新造

語であったことを念頭に置いて、

巻頭文をお読みいただければと思

います。(能)